

〈論文〉

観光資源としてのくまもと花博 —二度の都市緑化フェアの比較に基づく イベント機能の変遷と市街地の活用—

市 原 猛 志

要旨

2022年に行われた「第38回全国都市緑化くまもとフェア くまもと 花とみどりの博覧会」(愛称:くまもと花博)では、これまで行われてきた全国都市緑化フェアが都市公園の整備、あるいはその改修にかかる整備を中心に執り行われてきたことに対して、水前寺江津湖公園の再整備の他、都市公園の範囲ではない市街地に会場を設け、イベントを介して市街地に多くの観光客を招くことに成功した。また市街地エリアを会場に組み込む方式は、2022年度及び2023年度の都市緑化フェア会場にも導入される予定であり、それまで囲い込み型のイベント会場で行われてきた展覧会イベントとは異なる、今後の都市緑化フェアにおける新たな潮流として注目に値する。

本研究では、これまで行われてきた都市緑化フェアが仮設パビリオンの建設と公園としての基盤整備中心であったものに対して、都市イベントとしてのコンテンツ整備へと変遷していった過程を、主に「第4回全国都市緑化フェア」(愛称:緑と水の博覧会 くまもとグリーンピクニック'86)と比較検証し、これまでの囲い込み型のイベント開催からオープン型にすることによる利点と課題、これからの展望について概観し、観光資源として博覧会を利活用する際の一助としたい。

キーワード: 全国都市緑化フェア、博覧会、都市公園、観光資源、市街地展示

目次

- 1 研究の背景
 - 2 既往研究
 - 3 研究の方法
 - 4 検証
 - (1) 比較対象としての「緑と水の博覧会 くまもとグリーンピック '86」
 - (2) 「熊本市動植物園 MasterPlan」と短期的整備としてのくまもと花博
 - (3) 花畑地区における都市公園改修と熊本地震からの復興
 - 5 考察
 - (1) 観光資源としての全国都市緑化フェア
 - (2) 実地調査
 - (3) 二度の全国都市緑化フェアを経て変わったもの
- まとめ

1 研究の背景

「第38回全国都市緑化くまもとフェア くまもと 花とみどりの博覧会」（愛称：くまもと花博、以下愛称を用いる）は、熊本市及び公益財団法人都市緑化機構が主催し、2022年3月19日から5月22日までの65日間、図1に示したようなメイン会場熊本市内3ヶ所といくつかのサテライト会場を設け開催された。国土交通省の提唱する「都市緑化に関する知識の普及等を図ることにより、もって緑豊かな潤いのある都市づくりに寄与する」ことを目的としたもので、同省が主催する全国都市緑化祭を中心行事として毎年一ヶ月以上の会期を設け実施されているイベントである。

これまでの都市緑化フェアでは、市街地近郊型の大規模都市公園¹の整備に大きく貢献し、福岡市のアイランドシティ公園や北九州市響灘緑地のグリーンパークなど、都市緑化フェアのレガシーと称すべき施設が全国各地に生まれている。熊本においては後述する水前寺江津湖公園が都市部の近隣公園として第4回全国都市緑化フェアの開催時に整備され、その一部が現在の熊本市動植物園となっている。

それに対して、今回のくまもと花博では、すでに公園としての機能を持っている「街なかエリア」、前回の会場である熊本市動植物園や水前寺成趣園を含めた「水辺エリア」、さらに

1 本稿で示す都市公園とは、都市公園法第二条に定める「都市計画施設である公園及び緑地」のことで、国営公園及び地方公共団体が都市計画区域内に設ける公園施設を含むものである。

やはり同様に都市公園としての設備を既に備えている「まち山（立田山）エリア」の3会場が設定されている。このような既存施設を有効活用し博覧会やイベントを行うことは、近年の博覧会関係では時折用いられる手法だが、今回のくまもと花博では、イベントという企画以外にどのような有形の資源をつくり、将来に渡る観光資源としているのか。これまでに行われてきた全国都市緑化フェアや国際博覧会などのイベントと比較することで、今回のくまもと花博のレガシーについて検証を行う。



図1 くまもと花博のメイン会場それぞれの位置関係図²

2 既往研究

全国都市緑化フェアとその事業効果に関する研究に関しては、主に都市計画からの観点と造園効果、ランドスケープからの観点のことが多い。

都市計画の観点からは中村・片桐（2019）を中心にこれまでに開催された都市緑化フェアが各地に遺してきたレガシーについて主にヒアリングを中心にとりまとめた研究のほか、浜口・三谷（2016）のようにパークマネジメント組織の観点から都市緑化フェアの運営手法に

2 くまもと花博パンフレットより、筆者改変。

について論じる研究がある。これらはいずれも、全国都市緑化フェアにかかる組織に関して注目されたものであり、その際に建設された恒久施設や地域への影響については造園学側からの研究に依存している。

都市緑化フェアの造園学からの視点による研究としては、早くから観光レクリエーションとしての効果が論じられており、木村・井上・上野（1985）は都市緑化フェア開催以前からの博覧会における緑の効果について論じ、また井原（2013）は国際園芸博覧会以降の土地利用に着目し、その中で都市緑化フェアが持つ地域色の強さについて指摘している。また近年では小川（2022）のように花博の歴史面についても言及がなされている。

今回のくまもと花博で注目すべきところは、全国各地で開催されている都市緑化フェアの多くがそれぞれ都市や会場を変えながら公園整備及び改修を進めている都市計画の一環として開催されていることに対して、くまもと花博においては、前回誘致した際の会場である熊本市動植物園を再び会場として選び、また、会場のひとつとして既存商店街などの既に都市基盤として整備された場所を会場として加えている点にある。このようなやり方は、博覧会全体の歴史を俯瞰してみると熊本独自というわけではない。長崎さるく博を代表とする特定のパビリオンを新たに構築しない形での市街地博覧会という形式は、近年増えつつあり、スポーツコンベンションの最たるもののひとつである、2024年開催予定のパリ・オリンピックでは、市街地の既存施設を活かす形での会場設定が予告されている。

本研究では、これまでの研究が地域観光に及ぼした影響について、人的なものや組織的なものに留まっていることを踏まえ、都市計画の視点から今回のくまもと花博が観光資源として遺した各種の影響についてとりまとめる。

3 研究の方法

今回の研究では、主な比較対象として1987年に第4回全国都市緑化くまもとフェア実行委員会が発行した『緑と水の博覧会 クマモトグリーンピック'86：公式記録』及び熊本市が2019年に発行した「全国都市緑化くまもとフェア 基本構想書」をそれぞれ比較検証し、また今年のくまもと花博における各会場を巡検することで、熊本市内の観光資源、とりわけ市街地と水前寺周辺において都市緑化フェアがどのように影響しているのか、実地で確認を行う。また同時に5月から7月までの開催期間中にくまもと花博の各会場を見学した学生の感想から各会場に関する意見を採りあげることで、来場者の視点におけるくまもと花博の効果についても検証を行う。

4 検証

(1) 比較対象としての「緑と水の博覧会 くまもとグリーンピック '86」

今回熊本市で開催された全国都市緑化フェアは、地域としては36年ぶり2回目の開催に当たる。全国都市緑化フェアは1983年の大阪府での初回開催以降、国際花と緑の博覧会が開催された1990年を除いて毎年開催地を変え全国各地で催されているイベントである。前回1986年に開催された熊本での都市緑化フェアは、第4回の開催であり、札幌市との同年開催でもあった。ちなみにこれ以降同年での開催は長らく行われなかったが、今回のくまもと花博が2021年度の実施でも年度を跨いだ後半期の開催となったため、秋にやはり第4回都市緑化フェアの同時開催自治体であった北海道の恵庭市で開催された「ガーデンフェスタ北海道2022」との同年開催となった。これまで開催された都市緑化フェアを表1にまとめる。

表1 これまでに開催された都市緑化フェアの実施概要

	フェア愛称	主催	会期(日数)	会場	来場者
1	グリーングロー大阪	大阪府	1983/9/23-11/23 (62)	服部緑地	148万人
2	モアグリーン東京	東京都	1984/10/5-11/10 (37)	日比谷公園、 代々木公園、 上野恩賜公園、 神代植物公園	550万人
3	コウバグリーンエキスポ '85	神戸市	1985/7/21-11/4 (107)	神戸総合運動公園	220万人
4	'86 さっぽろ花と緑の博覧会	札幌市	1986/6/28-8/31 (65)	百合が原公園	148万人
5	緑と水の博覧会 くまもとグリーンピック '86	熊本県、 熊本市	1986/8/1-10/12 (73)	水前寺江津湖公園	125万人
6	グリーンハーモニー さいたま '87	埼玉県、 浦和市、 大宮市、 川口市	1987/10/3-11/15 (44)	大宮第二公園ほか	206万人
7	緑・花・祭なごや '88	名古屋市	1988/9/30-11/23 (55)	名城公園、 若宮大通公園	153万人
8	'89 グリーンフェア仙台	仙台市	1989/7/29-10/16 (80)	七北田公園、 勾当台公園	139万人
9	グリーンルネッサンス 北九州 '91	北九州市	1991/9/14-11/11 (59)	響灘緑地、 勝山公園	135万人
10	グリーンウェーブ相模原 '92	神奈川県、 相模原市	1992/10/3-11/23 (52)	相模原公園、 相模原麻溝公園	181万人
11	グリーンフェア '93 いばらぎ	茨城県、 水戸市	1993/3/27-5/30 (65)	偕楽園公園、 千波公園	167万人
12	緑いきいき KYOTO '94	京都府、 京都市	1994/9/23-11/23 (59)	梅小路公園、 学研記念公園	236万人
13	グリーンシンフォニー CHIBA '95	千葉県、 千葉市	1995/8/25-10/22 (59)	幕張海浜公園、 稲毛海浜公園	159万人

14	彩りとやま緑化祭 '96	富山県、高岡市、砺波市	1996/4/20-9/1(135)	高岡古城公園、高岡おとぎの森公園	191万人
15	グリーンフェスタひろしま '97	広島市	1997/9/20-11/24(66)	広島大学本部跡地、中央公園ほか	156万人
16	にいがた緑のものがたり '98	新潟県、新潟市、新津市	1998/8/1-10/18(79)	県立鳥屋野潟公園、新潟県都市緑花植物園	98万人
17	グリーン博みやざき '99	宮崎県、宮崎市	1999/3/27-5/30(65)	阿波岐原森林公園	190万人
18	マロニエとちぎ緑花祭 2000	栃木県、宇都宮市、壬生町	2000/9/9-11/5(58)	壬生総合公園、壬生町立総合公園、宇都宮市立総合運動公園	142万人
19	夢みどりいしかわ 2001	石川県、金沢市	2001/9/8-11/11(65)	金沢城址公園、兼六園ほか	189万人
20	やまがた花咲かフェア '02	山形県、寒河江市、新庄市	2002/6/15-8/11(58)	最上川ふるさと総合公園(寒河江会場)	119万人
			2002/6/30-8/26(58)	最上中央公園(新庄会場)	
21	緑・香・in Oita 21	大分県、大分市	2003/4/28-6/29(63)	大分県スポーツ公園、佐野植物公園	90万人
22	しずおか国際園芸博覧会「パシフィックフローラ 2004」	静岡県、浜松市	2004/4/8-10/11(187)	浜名湖ガーデンパーク	545万人
23	アイランド花どんたく	福岡市	2005/9/9-11/20(73)	アイランドシティ中央公園	115万人
24	花・彩・祭おおさか 2006	大阪市	2006/3/25-5/28(65)	大阪城公園ほか	202万人
25	おとぎの国の花フェスタ in ふなばし	船橋市	2007/10/2-11/4(34)	アンデルセン公園	21万人
26	花と緑のシンフォニーぐんま 2008	群馬県、前橋市、高崎市	2008/3/29-6/8(72)	前橋公園、敷島公園、高崎城址公園周辺ほか	142万人
27	おかやま花だより ～未来へ～	岡山県、岡山市	2009/3/20-5/24(66)	西大寺地区、岡山城・後楽園	92万人
28	やまと花ごよみ 2010	奈良県、広陵町・河合町	2010/9/18-11/14(58)	馬見丘陵公園、平城宮跡、藤原宮跡、国営飛鳥歴史公園	210万人
29	花かごしま 2011	鹿児島県、鹿児島市	2011/3/18-5/22(66)	吉野公園、鹿児島ふれあいスポーツランド	96万人
30	TOKYO GREEN 2012	東京都	2012/9/29-10/28(30)	上野恩賜公園、井の頭恩賜公園、日比谷公園他	500万人
31	水と緑のオアシスとっとり 2013	鳥取県、鳥取市	2013/9/21-11/10(51)	湖山池公園ほか	26万人
32	浜名湖花博 2014 ～花と緑の祭典～	浜松市	2014/3/21-6/15(87)	浜名湖ガーデンパーク、はままつフラワーパーク	129万人
33	花と緑の夢あいち 2015	愛知県	2015/9/12-11/8(58)	愛・地球博記念公園	321万人
34	ガーデンネックレス横浜 2017	横浜市	2016/3/25-6/4(72)	山下公園、横浜公園、横浜動物の森公園他	600万人

35	みどりの丘の花絵巻 はちおうじ 2017	八王子市	2017/9/16-10/15	富士森公園他	70万人
36	山口ゆめ花博	山口県、 山口市	2018/9/14-11/4(52)	山口きらら博記念公園	136万人
37	信州花フェスタ 2019 ～北アルプスの贈りもの～	長野県、 松本市、 大町市、 塩尻市、 安曇野市	2019/4/25-6/16(53)	長野県松本平広域公園	70万人
38	ひろしま はなのわ 2020	広島市、 呉市、 竹原市、 三原市、 ほか	2020/3/19-5/24(67) 2020/3/19-11/23 (250)	中央公園、 国営備北丘陵公園、 県立せら県民公園、 県立びんご運動公園、 県立みよし公園	160万人
39	くまもと花とみどりの博覧会 ～ THE GREEN VISION 未来への伝言～	熊本市	2022/3/19-5/22(65)	街なかエリア 水辺エリア(水前寺周辺) まち山(立田山)エリア	168万人
40	ガーデンフェスタ北海道 2022	北海道	2022/6/25-7/24(30)	花の拠点・中島公園、 隣接する河川空間、 まちなか会場	30万人
41	未来の杜せんだい 2023～Feel green!～	仙台市	2023/4/26-6/18(54)	青葉山公園追廻地区、 西公園南側地区、 広瀬川地区、 まちなかエリア会場、 東部エリア会場	予定
42	未定	川崎市	2024/10-11(20程度) 2025/3(30程度)	富士見公園、 等々力緑地、 生田緑地	予定

*注 国土交通省ウェブサイト
(https://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/fukyu/toshiryokka/toshiryokka_kaisai.html)
及び、公益財団法人都市緑化機構ウェブサイト
(<https://urbangreen.or.jp/category/info-event/ryokukafair>) を元に筆者で情報を付記した。
*左数字と開催回数に齟齬が生じているが、これは1986年の第4回の開催地が2ヶ所あったため。

① 全国都市緑化フェアの目的

この全国都市緑化フェアは、国土交通省（提唱当時は建設省）の全国的な都市緑化の推進という目的の下、「都市緑化に関する意識の高揚と知識の普及等を図るための中心的行事」として位置づけられている。実際「全国都市緑化フェア開催要綱」³には、先ほどの位置づけが第1条の目的として掲げられるとともに、第3条として「フェアは、都市公園又は設置が予定されている場所を主たる会場として開催するものとする」と明記されており、この都市緑化フェア自体が都市緑化のために都市公園を整備していくという方針が記されている。既存公園の都市公園としての改修や新規の都市公園整備という方針があるが故に、初期の開催地は県庁所在地もしくは政令市など後背地としての都市圏をもった地域に限られており、21世

② 第4回全国都市緑化フェアの開催

来場者数は約 125 万人で、博覧会パビリオンとしては、緑と水のテーマ館とグリーンピクシアター館を中心に富士通パビリオン、友誘館ハイビジョンシアター、ニューメディア館などの仮設建築が作られた。



図2 第4回全国都市緑化フェア会場図（図左下は市街地との位置関係）⁴

4 『緑と水の博覧会 クマモトグリーンピック '86：公式記録』 86 ページより、筆者改変

水前寺江津湖公園には併設して、その発祥を水前寺成趣園東側に1929（昭和4）年に設けられた「熊本動物園（水辺動物園）」があった。この動物園は日本国内でも珍しい戦前期に作られた動物園であったが、1969年に現位置に移転し、この都市緑化フェア開催時に際しては、動物園は動物ふれあいコーナーやアニマル広場といった形でフェア内の会場の一部に組み込まれ、来場者を楽しませた。現在の熊本市動植物園は、都市緑化フェア時に水前寺江津湖公園に設置された円形花壇などを活用して作られた植物園である熊本市都市緑化植物園と一体化する形で、1991（平成3）年に現在の動植物園となっている。

以上歴史的背景をまとめると、水前寺江津湖公園は、前史としての水源地としての重要性や細川藩の庭園としての側面を持っていたが、現在の市街地に近接した都市公園としての整備は、クマモトグリーンピックを契機として行われ、現在の熊本市動植物園は、クマモトグリーンピックの開催を象徴する一番のレガシーであると考えられる。

③ 比較対象としてのクマモトグリーンピックにおける観光効果

クマモトグリーンピックが熊本市にもたらした経済効果について、丸山定巳は「土木・建設や観光部門などへの直接的な波及効果に劣らず、熊本県の主要産業たる第一次産業部門での生産誘発効果にも大きいものがあった」⁵と述べている。

この中で第一義に述べられている土木・建設にかかる費用についてであるが、このクマモトグリーンピックでは、会場内にパビリオンとして主催者館2館、特設館（2社、1グループ、2団体）3館、及び企業や団体が構成される集合館2館、さらに県内の特産品や名産品を販売するパサール館が1館建てられ、予算概要（表2）によるとこれら施設工事費は当時の価格でも5億円を超えている。一方管理運営費に関しては当初予算が4億5822万円、最終的には6億7200万円に達しているが、全体の事務局予算13億円の中でも施設の建設にかかる予算がかなりのウエイトをしていることが分かる。一方、クマモトグリーンピックでは入場料収入を予算に見込んでおり、それが7億2433万円と見込まれていることから、施設建設は入場料収入でまかなえる計算となる。

5 『緑と水の博覧会 クマモトグリーンピック '86：公式記録』101ページより

表2 グリーンピック事務局予算の概要⁶（単位・百万円）

収入		支出	
入場料収入	724.33	基本整備工事	57.42
出展料収入	130.27	会場整備工事	65.28
営業参加収入	32.25	基幹施設工事	183.37
施設参加収入	20.00	展示館建設費	203.70
協賛金収入	120.00	営業施設建設費	18.74
主催者負担金	300.00	修景施設	178.88
寄付金他	13.23	展示工事	160.00
		会場復旧費	5.00
		管理運営費	458.22

建設された施設についてさらに詳細に見ていくと、鉄骨構造が5館見られるが、いずれも恒久施設として位置づけられておらず、施設のほとんどはテント構造（8棟）及びプレハブ構造（14棟）で構成されており、会期終了後の撤去が容易なものが建設されている⁷。これはクマモトグリーンピックの会場として設定されている水前寺江津湖公園がそれまでの水源地・熊本細川藩の庭園を主体とした公園から、県の広域公園として改めて整備するための一環として、このときのクマモトグリーンピック開催が位置づけられていたことを明確に示しており、実際会場は会期終了後都市緑化植物園となっていることは既に記したとおりである。

このクマモトグリーンピックにおける経済効果として、報告書には直接効果 94 億 4300 万円、間接的な生産額増加として 174 億 5700 万円が計上されている⁸。直接的には入場料やグッズ売上げ、施設建設にかかる需要、間接的には熊本県内における一次産業の促進が記されている。観光客の動員は、九州域内ではおおよそ 90 万人、県外からは 10 万人の入場者を迎えられると想定し、最終的には 125 万 5794 人の来場者を迎えている。結果として 14 億円の宿泊費効果、また飲食費や交通費、グッズ購入などの経済効果を試算している。

ここまで紹介してきたクマモトグリーンピックとくまもと花博とを次章で比較していくが、この際に重要なポイントとしては、1986 年に開催されたクマモトグリーンピックは 1200 円の入場料をとる囲い込み型のイベントであったことが挙げられる。このようなイベントでは入場料収入が見込める一方で、支払い側としてはその支払金額に見合っただけのイベントの期待があり、そこに参加にかかるハードルが存在する。イベント会場内には、金額分に応じた非日常空間を演出する必要がある、パビリオンの建設は演出効果を高めるための舞台装置

6 同書 166 ページより

7 同書 135 ページより

8 同書 167 ページより

であると言える。オープン型の博覧会として開催されたくまもと花博との違いは、直接的な経済効果の違いにも表れるが、施設整備の点でも大きな違いがあることをここでは指摘したい。

(2)「熊本市動植物園 MasterPlan」と短期的整備としてのくまもと花博

かつてのクマモトグリーンピックの会場であり、1991年に現在の形となった熊本市動植物園は、2005（平成17）年に「熊本市動植物園再編整備計画」を策定し、「隣接する江津湖の水辺環境の特性を活かした生態観察の魅力向上を主眼とした再編整備」に取り組んできた。この結果、年を追うごとに順調に来場客数を伸ばしていったが、2016年の熊本地震による被害と一時休業を契機に方針の変更に迫られた。また2021年度のくまもと花博誘致が決定したことを受けて、短期的整備と中長期整備を念頭に置いた新たな「熊本市動植物園 MasterPlan」（以下、マスタープラン）を2020（令和2）年に策定した。

このマスタープランでは、くまもと花博における短期的整備が必要なものとして、以下の項目を掲げ、図3のように示している。

①「（仮称）水辺のインフォメーションセンター」、②ビューポイントの設置、③休憩スペース等の設置、④園路の段差解消、⑤案内サインの改修、⑥体験型涼場づくり、⑦園内トイレ改修、⑧遊戯施設の導入、⑨夜間照明改修、⑩正面ゲートリニューアル

これらは、実際にくまもと花博の際に整備され、熊本市動植物園がくまもと花博の「水辺エリア」パビリオンとして機能する際に貢献している。

図3 計画実現に向けた取り組みにおける整備目標（短期・3年以内）⁹

この図からも分かるように、今回のくまもと花博における動植物園の整備においては、新たな施設の建設が織り込まれておらず、わずかに（仮称）水辺のインフォメーションセンターの施設改修が園内における施設整備内容として記載されている。全国都市緑化フェアに関しては、他の博覧会イベントと比較すると、元々都市公園を造成する、または既存の公園を都市公園として改修することが主体となっているため、公園としての基盤整備がその予算出費の中心であるが、この水前寺江津湖公園については、くまもとグリーンピック開催時に既に都市公園としての基盤整備が終了しているため、今回はそのリニューアルに重点が置かれている。

全国都市緑化フェアが、都市公園の改修に使用されてきたことは、第2回の東京開催から行われている手法であり、これ自体は必ずしも珍しいものとは言えない。しかし、今回のくまもと花博の中では水前寺成趣園とともに有料見学施設として熊本市動植物園が位置づけられていることから、展示内容に際しても従来の動植物園としての内容以上に都市緑化フェア独自の特色が必要となる。これはイベントの開催によるフォローや市民参加型の花弁類展示などに表れているかもしれない。

9 (2020)「熊本市動植物園 MasterPlan（概要版）」8ページより、筆者改変。

(3) 花畑地区における都市公園改修と熊本地震からの復興

くまもと花博における会場のひとつとして、街なかエリアにおける花畑公園と辛島公園は水前寺江津湖公園と同様に都市公園の改修事例として考えられるが、この街なかエリアに関しての重要なキーワードとして、熊本地震からの復興が指摘できる。

今回の都市緑化フェア誘致に際して、熊本市が掲げた開催理念のひとつに「熊本地震への支援に対する感謝と復興のメッセージ」が掲げられている。2016年4月14日及び16日に発生した熊本地震では、熊本城の石垣の大規模な崩落が生じるなど、市街地に大きな爪痕を残した。日本全国から地震被害に対する災害ボランティアや救援物資が届き、日本赤十字社、共同基金会及び熊本県に寄せられた義援金の総額は約353億円¹⁰に及ぶ。2021年には熊本城天守閣の復興が予定されていたため、会場設定に熊本城公園を置き、地震からの復興を内外にアピールする機会としてこのくまもと花博が位置づけられていたことは想像に難くない。

公園整備としては、元々都市公園として存在した花畑公園（敷地面積約2,600㎡）及び辛島公園（同約3,400㎡）というふたつの公園と両者をつなげるシンボルプロムナードに位置づけられたくまもと街なか広場（約8,900㎡）の整備が完成したことを内外に知らせる意味で会場設定が行われたことは考えられる。これはこれまでの都市緑化フェアの流れで言えば、開催趣旨に一番合致する設定であるが、このシンボルプロムナードの計画は熊本地震以前から既に立案¹¹、実行されており、くまもと花博誘致の動機には位置づけられるものの、ここに熊本城公園を加えた事による地震からの復興アピールという意味では、比較的副次的なものとも考えられる。

熊本城を望むシンボルプロムナードは開催期間中色とりどりの花々が会場の非日常空間を演出（図4）¹²し、また土休日を中心にイベントが開催された。会場ゲートを設けない会場形式であるため、参加者よりも通勤客や隣接するサクラマチクマモトを利用する市民にとってそれを全国都市緑化フェアの一環と認識することなく、花に親しむきっかけを得たのではない。



図4 会期中のくまもと街なか広場

10 2021年11月12日現在確認額。熊本県ウェブサイトより（2022年10月21日閲覧）。

11 熊本市（2014）「桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント基本計画」より

12 図2以降、使用する写真は全て筆者が撮影した。

5 考察

(1) 観光資源としての全国都市緑化フェア

観光資源として全国都市緑化フェアを考える際、これまでどのような位置づけで考えられてきたか。溝尾良隆¹³は観光資源をまず自然資源と人文資源に分類。人文資源の中でも価値の評価が定まっている資源（人文資源Ⅰ）と未だ定まっていない資源（人文資源Ⅱ）に分類し表3に掲げるような再分類を行っている。ここにおける全国都市緑化フェアの位置づけは、植物園、あるいは近代公園のカテゴリに属し、溝尾の分類方法から考えれば「現在は多数のんびとを集客しているが、将来そのように集客できるかどうか不明なもの」¹⁴と位置づけられる人文資源Ⅱに相当する。長くその場所に、あるいは同じ機能を持って位置づけられるものではないことから、人文観光資源を長くその機能を維持し続けるⅠ類とⅡ類とに分類する方法であり、各種のテーマパークやイベントはすべからく後者に属するものである。

表3 観光資源の分類¹⁵

自然資源	人文資源Ⅰ	人文資源Ⅱ
山岳、高原、原野、湿原、湖沼、峡谷、滝、河川、海岸、岬、島嶼、岩石・洞窟、動物、植物、自然現象	史跡、神社・寺院・教会、城跡・城郭・宮殿、集落・街、郷土景観、庭園・公園、橋・塔、年中行事	動植物園・水族館、博物館・美術館、テーマ公園・テーマ施設、温泉、食、芸能・興業・イベント

これまで開催された全国都市緑化フェアの会場跡地の中には、有料施設として存続しているものも少なからず存在する。1991年に福岡県北九州市で開催された全国都市緑化フェアのメイン会場であった響灘緑地は、有料の都市公園「グリーンパーク」として1992年に開業し、今年（2022）で30周年を迎える。園内には都市緑化フェア開催時に整備された熱帯生態園（図5）をはじめとした施設が現在でも使用されており、これは溝尾の分類であれば植物園として人文資源Ⅱに属するが、有形のレガシーとして市民の憩いの場となっている。熊本市動植物園は、その母体としての動物園があったことは間違いのないものの、植物園機能は都市緑化フェアによる成果のたまものであり、やはり人



図5 グリーンパーク熱帯生態園

13 溝尾良隆（2019）「観光資源」『観光の辞典』20ページより

14 同書20ページより

15 溝尾良隆（2014）『改訂新版 観光学 基本と実践』古今書院より

文資源Ⅱに属するが、複合的な存続例と考えることが出来る。

これらに見られる有形の観光資源として代表する施設は、今回のくまもと花博では何に相当するのだろうか、次節でそれぞれのエリアについて述べてみたい。

(2) 実地調査

くまもと花博の開催期間中である 2022 年 5 月 2 日（街なかエリア）、同 5 月 10 日（水辺エリア）、同 5 月 11 日（まち山（立田山）エリア）に筆者はメイン会場となっている 3 地区にそれぞれ訪れ、各会場における展示内容について確認した。また授業内の自由課題¹⁶として開催中のイベント参加をレポート課題として位置づけた際、くまもと花博に関するレポートを複数受け取ったため、ここでは筆者の視点及び学生の視点双方から見たくまもと花博の特徴について述べる。

① 街なかエリア

街なかエリアの会場には、熊本城公園及び花畑広場、さらには上通り・下通り・新市街の各商店街アーケードが会場となっている。公園と広場に関しては、花々の展示の他、くまもとマルシェやみどりのマルシェといったイベントが催された。会期中には夜間イベントとして近年全国的に流行しつつある竹灯りイベントが街なかエリアで催され、別会場である立田山で伐採された竹を使用するなど離れたエリアでの連携なども見られた。

メイン会場に位置づけられているエリアの中で最も特徴的な部分が、街なかエリアにおける商店街アーケード内の各種植物展示（図 6）である。このアーケード内には、これまで都市緑化フェアを開催した自治体からの自治体をイメージした作品展示や地元各種団体による植木展示などが並べられていた。花博に関連する自治体の展示と合わせ、これまで行われてきた全国都市緑化フェアのバトンを受け継ぐ展示が、囲い込まれた会場ではなく商店街アーケード内でオープン展示されていることは、イベントに関心がない市民層への PR として大きな効果があったと考えられる。

学生のレポートには、「全国の自治体の特色を表した花壇で造られた休憩スペースには多



図6 街なかエリア（下通商店街アーケード）

16 2022 年度熊本学園大学「観光と産業」及び「観光資源論」内の任意レポートのうち 10 点を用いた。

くの人が立ち止まり、休んだり、展示物を眺めたり、思い思いにイベントを楽しんでいるように見えた」¹⁷とあり、このような親しみ方は会場設定による囲い込み型のパビリオン展示ではなかなか見られない特徴と言える。

② 水辺エリア

前回の会場である熊本市動植物園を含めた水辺エリアは、有料施設を中心としたある意味全国都市緑化フェアの伝統的な部分を色濃く留めた会場と言える。クマモトグリーンピクニック会場（図2）で「花の大広場」として用いられた大花壇（図7）がリニューアルされ、色とりどりの花で埋め尽くされた。

学生のレポートの中には、今回の博覧会における各エリアではとりわけ花々の美しさに関する言及が多いが、この水辺エリアの展示に関しては、一部の学生が興味深い感想を述べている。それは、「観光地というよりも、県民の来る場所である」¹⁸という指摘である。

当初都市緑化フェアの会場として整備された動植物園は、36年の時間をかけて市民にとっては日常の一部となり、そこを観光地として考えづらくなったとも取ることが出来る。

そのような市民の憩いの場となっている水前寺江津湖公園には、やはり市民参加型の展



図7 水辺エリア（大花壇）



図8 水辺エリア（おもてなしプランター）

示が多く見受けられた。学生レポートの中で取り上げられたもののひとつに「おもてなしプランター」（図8）がある。これは「近隣の小学校や特別支援学校の子どもたちが作った」¹⁹もので、それ自体が動植物園会場までのガイドとしての機能を果たすほか、設置に協力した生徒たちを中心にイベントへの参加意識を醸成する非常に良い仕組みであると筆者も感心した。

17 2022年度熊本学園大学「観光と産業」任意レポートより

18 2022年度熊本学園大学「観光資源論」期末レポートより

19 2022年度熊本学園大学「観光と産業」任意レポートより

③ まち山（立田山）エリア

まち山（立田山）エリア会場については、立田自然公園内に設けられたお祭り広場が会場となっている。

立田自然公園自体は、元々熊本藩細川家の墓所が位置しており、1955（昭和30）年に細川家から熊本市に貸与され、その後市による整備を経て熊本市立立田自然公園として一般に公開されている。

今回のくまもと花博におけるまち山（立田山）エリアでは、公園の一角をお祭り広場として整備し、土休日にはキッチンカーが集まるイベント会場、また遊具（図9）を整備することによる主にファミリー層向けのアトラクション会場として整備された。市街地から一定の距離があることから、他の2会場とは色合いを大きく異にする。

学生のレポートからは、この傾向についてとりわけ如実に感想が加えられている。「主に家族層をターゲットにしていると思った。遊具やワークショップ内容、その他のイベントに関しても家族連れをターゲットにしており、エリアの端ではテントを広げて子どもを遊ばせているご家庭もあった」「大人も楽しめるようなエリア設計をした方がより多くの集客を見込めたのでは」²⁰とあり、客層を絞った展示内容であったことが類推できる。た

だ、筆者が訪れた日は平日であったこともあり、家族連れの来場者は少なく年配層の来場者も見受けられたが、結果的にその方々も滞在時間が短かったように見えた。

なお、この会場では、くまもと花博における恒久施設整備の例としてほぼ唯一と言っても良いトイレ（図10）が設置され、外壁には焼杉板を用いており、伝統工法と内部の最新設備とが融合した施設を見ることが出来る。



図9 まち山エリア（お祭り広場遊具）



図10 まち山エリア（トイレ及び自動車乗降場）

(3) 二度の全国都市緑化フェアを経て変わったもの

これまでの全国都市緑化フェアの中で、二度開催している都道府県は複数存在するが、同一の会場で開催した自治体は3都県²¹しか存在しない。今回の水前寺江津湖公園は、同一会場での開催であるが故に、これまでの36年間でイベントがどのように変容していったかを示す格好の事例と言えよう。

熊本で開催されたそれぞれの都市緑化フェアの比較表（表4）を下に示す。なお、くまもと花博に関しては公式の報告書がまだ刊行されていないため、この表におけるくまもと花博のデータについては、熊本日日新聞をはじめとした報道ベースで示されているものを記載しており、今後端数に若干のズレが生じることをあらかじめ付記する。また、ここで示した経済効果の指標については、物価差もあり、また計算方法によって増減があるため、単純な比較が難しい。

表4 くまもと花博とクマモトグリーンピックとの比較

	くまもと花博(2022)	クマモトグリーンピック(1986)
会場	街なかエリア 水辺エリア(水前寺周辺) まち山(立田山)エリア	水前寺江津湖公園 (現在の熊本市動植物園)
会期	2022/3/19～5/22(65日間)	1986/8/1～10/12(73日間)
入場者数	168万5000人 (県外参加者数1割と想定)	125万5794人 (県外参加者数3割と想定)
市内経済効果	約181億8000万円	94億4300万円
入場料	基本無料(動植物園入園料・500円)	1200円
出展企業 (パビリオン) ²²	なし(オープン会場)	富士通、ホンダ、NTT、NEC、三菱電機、松下電器、日本たばこ、九州電力、郵政、熊本工業大学、化血研、立石電機、熊本県食品産業協議会、丸菱産業
サテライト会場の有無	あり(パートナー会場45ヶ所)	なし
閉幕後イベントの有無	あり(くまもと花博2022秋)	なし

くまもと花博については新型コロナウイルス感染拡大に伴うまんえん防止等重点措置²³の実施期間が2022年1月21日～3月21日までとなっており、一部会期と重複していたため、

21 今回の熊本市水前寺江津湖公園以外では、東京都（上野恩賜公園）及び広島市（中央公園）が該当。

22 クマモトグリーンピックの報告書に記載している出展企業を列記した。企業名はいずれも当時のもの。

23 新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置に関する公示の全部を変更する公示（令和4年3月4日新型コロナウイルス感染症対策本部長）（2022/10/20 閲覧）

イベント実施に対しての両者の置かれた状況には大きな違いが生じている。

両者の比較の中で一番特徴的な部分は、出展パビリオンの有無と市街地会場の設定である。市街地の既存施設を博覧会に組み込むやり方は、くまもと花博が最初というわけではない。一番有名なものとして、2006年4月1日から10月29日まで開催された「長崎さるく博'06」があり、またそのモデルとしてプロデューサーである茶谷幸治が言及している「アーバンリゾートフェア神戸'93」からの流れ²⁴がそうだとと言える。このようなまちあるき系博覧会の、これまで開催された全国都市緑化フェアと異なる点としては、施設設置よりもガイドによるまちあるきがベースであることが挙げられる。このようなオープンタイプの博覧会では、これまでの博覧会に見られるような、新たに整備・設置、あるいは改修したメイン会場とパビリオンを主体とする囲い込まれたエリアとして整備は求められておらず、結果として入場料は発生しないか、それまでに行われた博覧会より比較的低廉に抑えられている²⁵。このような考え方は、テーマパーク業界においても近年検討されている考え方であり、入場料そのものは撤廃する代わりに、数々のアトラクションを利用する際に回数券やチケットを用意する方法が取られている。企業博物館²⁶などではこういった運営形態を取るところが多い。くまもと花博においては、基本的に入場料を無料に設定することによって、商店街アーケードでの展示を可能とし、またいくつかのサテライト会場を置くことによって会期中の日常と博覧会との融和性を示す事が出来たのではないかな。

まとめ

今回、くまもと花博との比較対象として取り上げたくまもとグリーンピックは、同じ都市緑化フェアであるにもかかわらず施設整備型博覧会の典型的な姿であり、今回2回目の熊本市での開催となった36年もの間に、全国都市緑化フェアのあり方が大きく変貌してきたことを示していた。20世紀までに行われてきた大型イベントの多くが、施設整備を伴った重厚長大のイベントであったことに対して、オープンタイプ・あるいは施設整備を必須としない既存施設の有効活用型イベントにシフトしてきたことは、都市の成熟を示していることとともに、観光資源としての都市の活用がなされない限りは、有効なイベントを打ち出すことが出来ないという問題点をも示している。

24 茶谷幸治（2008）『まち歩きが観光を変える 長崎さるく博プロデューサー・ノート』学芸出版社、49ページ

25 その代わりに有料のガイドツアーを設けることで、単なるまちなみ散策との違いと「非日常感」を演出している。

26 大阪府池田市のカップヌードルミュージアムや北九州市のTOTOミュージアムなどが代表例。

観光資源としてくまもと花博の試みを概観すると、他の地域で行われているレガシーイベントとともに植物園あるいは近代公園として人文資源Ⅱのカテゴリに位置づけられる現在の都市緑化フェアを年中行事化することによって、価値の変わらない人文資源Ⅰに位置づけようという試みの一部ではないかと見ることも出来る。これはくまもと花博終了後に開催されている「くまもと花博 2022 秋」²⁷にも顕著に表れており、実際に熊本市はこれをレガシーイベントであると公称している。中村らの研究²⁸によると同様のイベントは現在の都市緑化フェア終了後のレガシーイベントとしていくつかの開催自治体が採用しており、クマモトグリーンピックに見られるような仮設パビリオン中心の時代から、前記した記した北九州市における熱帯生態園のように恒久施設を建設し、イベント開催後に建物をレガシーとして転用する流れを経て、現在また新たな転換が行われつつあることをここに見ることが出来る。

本研究では、クマモトグリーンピックとの比較から今回のくまもと花博における観光資源としての位置づけについて概観してみた。日本の経済成長が変容を見せた 1980 年代において、都市緑化の目的で開催されその施設建設における経済効果を併せて全国各地で催されてきた全国都市緑化フェアが、36 年の時を経てイベントを通じて花に親しむ「こと」への関心に寄せていく潮流を見ることが出来た。その一端として、くまもと花博は一定のエリアを設けず市街地に会場を浸出させ、多くの市民がイベントに関わる形態を作り出すことに成功した。これは都市緑化フェアそのものが新型コロナウイルス感染拡大を契機にオンライン開催なども検討されていく中で、無形の観光資源を形成していくイベントへと変化していったことを示す事例として、今後位置づけられると考えられる。

公式の報告書の発行後には、より詳細な比較検討が可能となる。その際に求められる今後の課題としては、他都市における都市緑化フェア・アフターイベント（レガシーイベント）の展開と比較していくことで、都市観光の中で花卉展示が示す有効性やアフターコロナにおけるイベント展開のポイントについて、さらなる分析が求められる。

27 https://www.city.kumamoto.jp/hpkiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=44499（2022 年 10 月 20 日閲覧）

28 中村優里、川原晋、片桐由希子（2018）「全国都市緑化フェアがもたらすレガシーとその持続性について」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）』日本建築学会、13 ページより

参考文献

- 木村弘、井上忠佳、上野泰(1985)「緑の空間づくり」『造園雑誌』48-4、日本造園学会
- 清水正之(2000)「博覧会の効用と公園緑地の形成」『ランドスケープ研究』64-1、日本造園学会
- 賀来宏和(2000)「園芸博覧会と時代創造」『ランドスケープ研究』64-1、日本造園学会
- 茶谷幸治(2008)『まち歩きが観光を変える 長崎さるく博プロデューサー・ノート』学芸出版社
- 茶谷幸治(2012)『「まち歩き」をしかける：コミュニティ・ツーリズムの手ほどき』学芸出版社
- 井原縁(2013)「「大阪国際花と緑の博覧会」を中心とした国際園芸博覧会に伴う土地利用変化とその背景」『ランドスケープ研究』76-5、日本造園学会
- 大橋昭一、遠藤英樹、神田孝治、橋本和也編(2014)『観光学ガイドブッカー新しい知的領野への旅立ち』ナカニシヤ出版
- 中村優里、片桐由希子(2019)「全国都市緑化フェアの効果とイベントレガシーとしての評価」『都市計画論文集』Vol.54.No.3、日本都市計画学会
- 白坂蕃、稲垣勉他(2019)『観光の事典』朝倉書店
- 小川明子(2022)「園芸のある暮らしと花博の始まり」『セミナー年報』関西大学経済・政治研究所、
- 第4回全国都市緑化くまもとフェア実行委員会(1987)『緑と水の博覧会 くまもとグリーンピック '86：公式記録』
- 国土交通省(2011)「国都緑環第72号 全国都市緑化フェア開催要綱」(2022/10/20 閲覧)
- 熊本市(2019)「全国都市緑化くまもとフェア 基本構想書」(2022/10/20 閲覧)
- 熊本市(2020)「熊本市動植物園 MasterPlan」2020(2022/10/20 閲覧)

Study on Kumamoto Flower Expo as a Tourism Resource: Changes in Event Functions and Utilization of Urban Areas Based on a Comparison of National Urban Greenery Fair in 1986 and 2022

Takeshi ICHIHARA

Summary

At the 38th National Urban Greenery Fair in Kumamoto (nickname: Kumamoto Flower Expo) held in 2022, the national urban greening fairs that have been held so far have focused on the maintenance or renovation of urban parks. In response to this, the Kumamoto Flower Expo succeeded in inviting many tourists to the city through events by redeveloping Suizenji Ezuko Park and setting up a venue in the city.

In addition, the method of incorporating the city area into the venue of the Flower Expo is scheduled to be introduced at the National Urban Greenery Fair venues in 2022 and 2023, and is different from the exhibition events that have been held in enclosed event venues until then. It is attracting attention as a new trend in future national urban greenery fairs.

In this research, we will mainly compare and verify the "4th National Urban Greenery Fair" (nickname: Green and Water Expo Kumamoto Green Pick '86). Until now, urban greening fairs have mainly consisted of the construction of temporary pavilions and the maintenance of infrastructure as parks. This has now changed to content maintenance as an urban event. In this research, I will give an overview of the advantages and challenges of setting up venues in urban areas from conventional enclosure-type events.